

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H01080

研究課題名(和文) 親密関係での問題行動に関する前向き研究：暴力・ストーキングの連関とその動的リスク

研究課題名(英文) A prospective study of problematic behavior in intimate relationships: the association between violence and stalking and its dynamic risks.

研究代表者

金政 祐司 (KANEMASA, Yuji)

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：70388594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、夫婦関係や恋愛関係といった親密な関係における暴力(Intimate Partner Violence; IPV)ならびに親密な関係破綻後のストーキングに関するリスク因子を特定することを目的としたものである。実施したいくつかの縦断調査の結果から、見捨てられ不安という特徴をもつ愛着不安は、日常的な感情やネガティブな出来事への感情的な反応を介して、IPV加害やストーキング加害を増大させること、また、反社会的なパーソナリティ特性であるダークトライアドは、直接的にIPV加害やストーキング加害を増大させることが示された。加えて、交際中のIPVが関係破綻後のストーキングを予測することも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、重要な公衆衛生の問題であるとされるIPVならびにストーキングを対象として、それらのリスク因子について前向き調査を実施して検討を行ったが、本研究結果は、個人の特性や日常的な感情経験が、将来的なIPVを予測すること、また、交際中のIPVが交際関係破綻後のストーキングにも影響を与えうることを示すものである。このような知見は、親密な関係での問題行動の未然防止(一次予防)、また、それらの問題行動の早期発見と介入による深刻化防止(二次予防)のために有用なものであり、また、IPVやストーキングに関する予防教育においても活かすことのできるものであると言える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify and examine predictors of intimate partner violence (IPV) and stalking after breakups of intimate relationships. Results from several longitudinal surveys indicated that attachment anxiety, characterized by fear for abandonment, increased IPV and stalking through daily emotions or emotional responses to negative events, and that the Dark Triad, antisocial personality traits, directly increased IPV perpetration and stalking perpetration. Additionally, IPV during relationships predicted stalking after breakups of intimate relationships.

研究分野：社会心理学

キーワード：DV DaV(デート暴力) ストーキング 夫婦関係 恋愛関係 縦断調査 愛着不安 ダークトライアド

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

配偶者や交際相手といった親密な関係内の暴力 (Intimate Partner Violence、以下 IPV)、ならびに、親密関係破綻後のストーキングは、現在、大きな社会問題となっており、配偶者からの暴力(Domestic Violence、以下 DV)やストーキングの警察での取扱件数は増加の一途をたどっている(警察庁, 2017)。また、内閣府(2015)の男女間暴力調査によれば、交際相手からの暴力(Dating Violence)の被害経験率は、女性で約 5 人に 1 人、男性で約 10 人に 1 人であり、その問題の裾野は広い。さらに、Dating Violence やストーキングの女性被害者の約 2 割が、心身の不調や外出への恐怖、退職や退学等の心理面・生活面でのネガティブな帰結を報告している(内閣府, 2015)。これらのことを踏まえれば、親密な関係での問題行動が発生した後の対処(三次予防)だけでなく、問題行動の未然防止(一次予防)、また、早期発見と介入による深刻化防止(二次予防)のためのエビデンスの創出が早急に求められる。

しかし、従来の研究は被害経験についての回顧的な調査や事例研究にとどまり、IPV やストーキングの危険因子と防御因子を確定できる前向き研究(prospective study)や日常生活における葛藤がそれらの加害・被害にどう発展するかについて検討を行った研究はほとんど存在しない。

それゆえ、本申請研究では、親密関係での問題行動である IPV やストーキングについて、前向き調査を実施することで、ある時点の個人特性、関係特性、ライフスタイルといった要因が、事後の IPV やストーキングを予測するかを社会心理学と犯罪学の両面から総合的に検討する。その際、IPV は次第に激しさを増すというエスカレートモデル(Murphy & O' Leary, 1989)を踏まえ、その経時的変化を明らかにする。

2. 研究の目的

【研究 1】これまでの研究では、パーソナリティ特性の愛着不安は、親密な関係内(金政ら, 2018; Overall et al., 2014)あるいは日常生活(Tidwell et al., 1996;)におけるネガティブ感情経験やストレス経験と関連することが報告されている。また、愛着不安は、親密な関係での暴力を増大させるという報告もある(Godbout et al., 2009; Ulloa et al., 2014)。同様に、パーソナリティ特性のダークトライアドも、敵意(Jonason, & Webster, 2010)や嫉妬(Chin et al., 2017)といったネガティブ感情と正の関連を示し、加えて、親密な関係での暴力を増大させる要因となることが報告されている(Carton & Egan, 2017)。これらの研究を踏まえ、本研究では、愛着不安とダークトライアドが高い場合、日常的にネガティブ感情を経験しやすく、そのようなストレスから、後のパートナーに対する間接的暴力を増大させるであろうという仮説を設定し、1 年間にわたる前向きペア調査を実施し、収集したデータがペアデータであることを考慮して、Actor-Partner Interdependence Model を用いて検討を行った。

【研究 2】本研究では、愛着不安と心理的 IPV 加害との関連を介する要因として、感情調節不全としてのセルフ・コンパッション(以下、SC)の低さに着目する。SC は、自身が経験する苦痛に寛容になり、それを軽減することであるとされる(Neff, 2022)。これまでの研究でも、愛着不安と SC は負の関連があることが示されていることから(Lathren et al., 2021)、愛着不安の高さは、恋愛関係における感情調節不全としての SC の低さを介して心理的 IPV 加害を増大させると考えられる。また、親密性回避と心理的 IPV 加害を介する要因として、本研究では、恋愛関係における向社会的志向の欠如として捉えられる思いやり目標を想定する。思いやり目標は、他者の幸福をサポートするための動機づけを意味するとされる(Canevello & Crocker, 2015)。それゆえ、親密性回避は、恋愛関係においてパートナーにサポートを提供することへの動機づけを低めることで、心理的 IPV 加害を増大させると考えられる。

【研究 3】ストーキングは、重大な公衆衛生の問題として世界的に認識されている(Edwards et al, 2022)。そのようなストーキング加害を増大させるリスク要因としては、これまで愛着不安(Dye & Davis, 2003)やダークトライアド(Branković et al., 2022)といったパーソナリティ特性、交際中のパートナーに対する IPV 加害やパートナーへの支配欲求(Backes et al., 2020; Davis et al., 2000)、さらに、関係破綻後の反応、特に怒りや反芻といった反応(Parkhill et al., 2022; Spitzberg & Cupach, 2007)に関して検討がなされてきている。しかしながら、それらの研究は、主に回顧的研究であることから、パーソナリティ特性や交際中のパートナーへの心理的暴力行為といったリスク要因と関係破綻後のストーキング加害との関連性について、時系列を踏まえた検討を行うには限界があると言える。それゆえ、本研究では、パートナーがいる個人を対象として、前向き調査を行い、愛着不安ならびにダークトライアドといったパートナー特性、また、交際時のパートナーへの心理的暴力が、関係破綻後の反応やストーキング加害を増大させるプロセスについての検討を行った。

3. 研究の方法

【研究 1】インターネット調査会社の保有するモニターを対象(夫婦のどちらかが 30 代以上 50 代以下のペア) に調査を実施した。Time1~Time3 の全てに参加し、デモグラフィック項目で夫婦間に齟齬がなく、サティスファイス項目に誤反応していないカップル 471 組を分析の対象とした(夫と妻の平均年齢 46.00(9.28)歳、43.97(8.47)歳)。調査には、回答者やそのパートナーに関するデモグラフィック項目とともに、1. 一般他者版 ECR (中尾・加藤, 2004)の愛着不安尺度

<18項目, 7件法>、2. 日本語版 Dark Triad Dirty Doze(田村ら, 2015) <12項目, 5件法>、3. 日常生活でのネガティブ感情(Mroczek & Kolarz, 1998) <6項目, 5件法>、4. パートナーからの間接的暴力被害尺度(相馬・具志堅・上田, 2007) <6項目, 5件法>といった尺度を用いた。

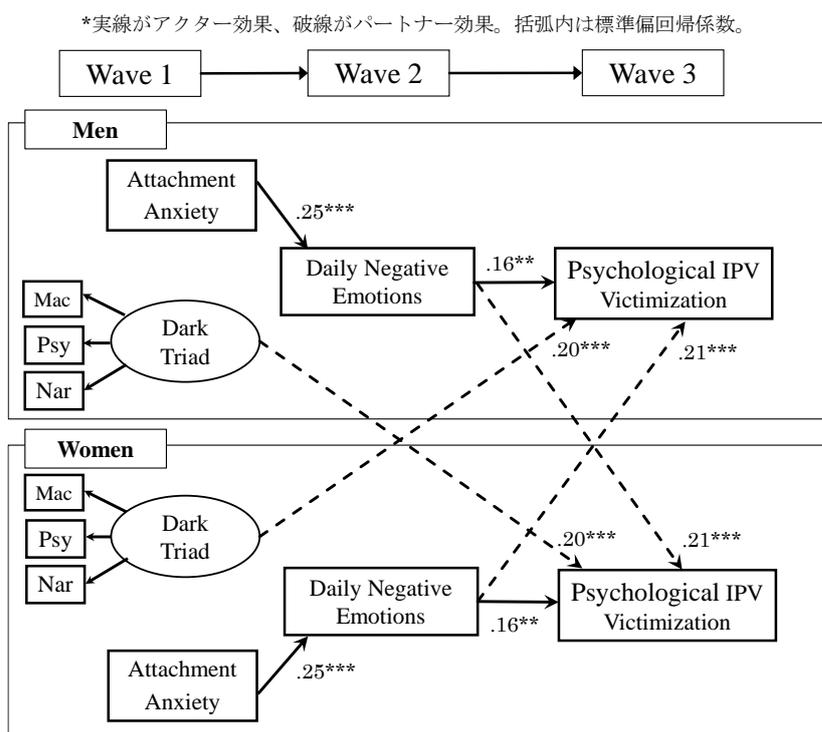
【研究2】インターネット調査会社のモニターのうち現在交際相手がいる18歳~34歳男女600名を対象に調査を実施した。ただし、サティスファイス項目に誤反応を示していた84名、ならびにすべての尺度に一律の回答をしていた3名は、分析から除外した。その結果、513名(Mage = 26.1, SDage = 5.2)を分析の対象とした。関係継続期間の平均は、28.0ヵ月(SD=27.9)であった。調査には、回答者やそのパートナーに関するデモグラフィック項目とともに、1. 恋愛関係全般に対する愛着スタイル尺度(古村他, 2016) <9項目, 7件法>、2. 状態セルフ・コンパッション尺度(Miyagawa et al., 2022) <18項目, 5件法>、3. 思いやり目標尺度(Niiya & Crocker, 2019) <6項目, 5件法>、4. 心理的IPV尺度(相馬他, 2007) <6項目, 5件法>といった尺度を用いた。

【研究3】現在交際相手がいる10~30代男女6183名を対象に第一波のWeb調査を実施した。その後、4ヵ月毎に1年間にわたって縦断調査を行った。第2波~第4波において恋人と別れたと報告した回答者は男女890名であり、そのうち恋人から別れを告げられたと回答した回答者は、366名であった。10名がサティスファイス項目に誤答していたことから、男性186名、女性170名の計356名(M age = 27.50, SD age = 6.51)を分析の対象とした。調査には、回答者やそのパートナーに関するデモグラフィック項目とともに、愛着不安の測定尺度(金政, 2006) <10項目, 7件法>、ダークトライアドの測定尺度(田村ら, 2012) <12項目, 5件法>、恋人支配欲求の測定尺度(Arai & Kanemasa, 2021) <10項目, 5件法>、心理的IPV加害の測定尺度(相馬ら, 2004) <6項目, 5件法>への回答を求めた。第二波から第四波では、関係破綻後の反応の測定尺度(金政ら, 2018) <8項目, 5件法>、ストーキング行動の測定尺度(金政ら, 2018) <19項目, 5件法>への回答を求めた。

4. 研究成果

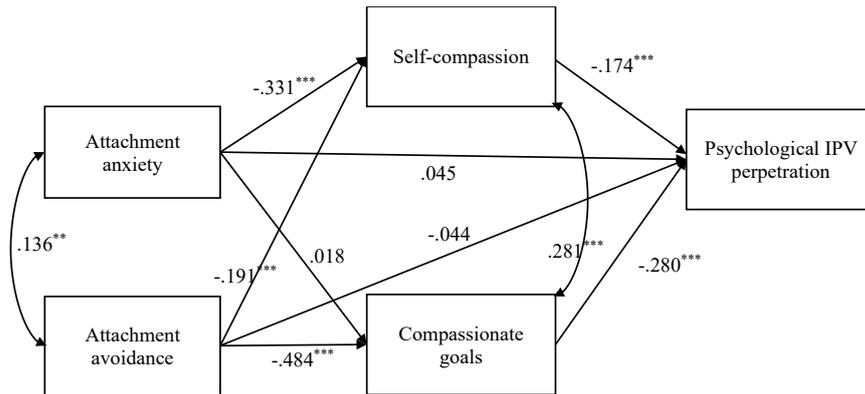
【研究1】愛着不安とダークトライアドから日常生活におけるネガティブ感情経験、さらに、間接的暴力被害に対する影響についてAPIM分析を行った。その結果(Figure 1)、アクター効果は、夫婦双方で、愛着不安からネガティブ感情への正の影響が、また、ネガティブ感情経験から後の間接的暴力被害への正の影響が認められた。加えて、愛着不安から本人のネガティブ感情を介した間接的暴力被害への間接効果も夫婦双方で有意であった。つまり、愛着不安の高さは、日常的にネガティブ感情を経験しやすくすることで、後の間接的暴力被害への脆弱性を増大させることが示された。パートナー効果は、夫婦双方でネガティブ感情から配偶者が報告した間接的暴力被害への正の影響が認められた。さらに、ダークトライアドから配偶者の間接的暴力被害への直接のパスが夫婦双方で有意となった。加えて、愛着不安から本人のネガティブ感情を介した配偶者の間接的暴力被害への間接効果も夫婦双方で有意であった。これらの結果から、ダークトライアドはネガティブ感情を媒介せず直接的に、愛着不安は本人の日常的なネガティブ感情を喚起させることで、後のパートナーへの間接的暴力加害を増大させることが示された。

Figure 1 愛着不安ならびにDTが日常的なネガティブ感情を介して間接的暴力に及ぼす影響



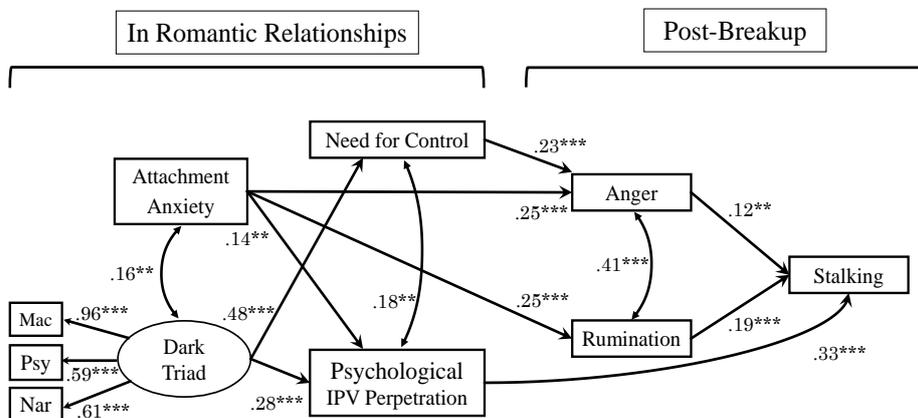
【研究 2】不安定な愛着が、恋愛関係での SC と思いやり目標の低さを介して、心理的 IPV 加害に及ぼす影響について検討するために、Figure 2 に示したモデルについて検討を行った。その結果(Figure 2)、愛着不安は、SC を低下させることで、心理的 IPV 加害を増大させることが示された。ただし、予測とは異なり、親密性回避も、SC の低さを介して心理的 IPV 加害を増大させていた。加えて、親密性回避は、思いやり目標の低さを介して、心理的 IPV 加害を増大させることが示された。本研究の結果から、愛着不安ならびに親密性回避は、恋愛関係において、困難時に思いやりを持って自己に向き合うことを阻害することで、心理的 IPV の加害を増大させることが示された。また、親密性回避は、恋人の幸福を高めようとする目標を低めることで、心理的 IPV の加害を増大させていた。これらの結果は、不安定な愛着が、IPV 加害を増大させるという先行研究との整合性を示すと共に、それらの関連性が自身やパートナーに対する思いやりを介するものであることを示唆している。

Figure 2. 不安定な愛着が、恋愛関係でのセルフ・コンパッションと思いやり目標を介して、心理的 IPV に及ぼす影響



【研究 3】 Figure 3 に示したモデルに関して共分散構造分析を行った。その結果、モデルの適合度は、良好であった。次に、間接効果についての検討を行ったところ、愛着不安ならびにダークトライアドは、交際中の心理的 IPV 加害を介してストーキング加害を増大させること、また、愛着不安は、関係破綻後の怒り感情や反芻思考を高め、そのことがストーキング加害を増大させることが示された。本研究の結果は、関係破綻後のストーキングが、交際時から既に心理的 IPV という形で潜在的に始まっている可能性を示唆するものと言える。すなわち、愛着不安やダークトライアドといったパートナー特性をもつ個人は、恋愛関係において勢力バランスを崩壊させ、パートナーに対して心理的 IPV を行いやすく、そのような関係内の勢力のアンバランスが、関係崩壊後にまで継続することでストーキングを増大させるものと考えられる。また、愛着不安は、関係破綻後の怒り感情や反芻思考を介してストーキング行動を増大させており、これは、愛着不安が、感情を介して将来的なパートナーへの攻撃性を予測していたという先行研究(Kanemasa et al., 2023)とも整合する結果である。

Figure3. 愛着不安ならびにダークトライアドが、パートナーへの心理的暴力や関係崩壊への反応を介して、ストーキング加害に及ぼす影響



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金政祐司・古村健太郎・浅野良輔・荒井崇史	4. 巻 92
2. 論文標題 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか？ 恋愛関係と夫婦関係の縦断調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.92.20013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanemasa, Y., Asano, R., Komura, K., & Miyagawa, Y.	4. 巻 85
2. 論文標題 The longitudinal associations between personality traits and psychological intimate partner violence.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Marriage and Family.	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jomf.12869	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanemasa, Y., Miyagawa, Y., & Arai, T.	4. 巻 196
2. 論文標題 Do the Dark Triad and psychological intimate partner violence mutually reinforce each other? An examination from a four-wave longitudinal study.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Personality and Individual Differences	6. 最初と最後の頁 Article 111714
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2022.111714	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyagawa, Y., & Kanemasa, Y.	4. 巻 -
2. 論文標題 Insecure attachment and psychological intimate partner violence perpetration: Low self-compassion and compassionate goals as mediators.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Family Violence	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10896-022-00436-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 金政祐司・古村健太郎・浅野良輔・荒井崇史
2. 発表標題 愛着不安はDaVやDVの先行要因となり得るのか？ 2つの親密な関係の縦断調査による検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒井崇史・金政祐司
2. 発表標題 愛着不安と恋人支配欲求とがDaVに及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒井崇史・金政祐司
2. 発表標題 恋人支配欲求尺度の作成と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuji Kanemasa, Ryosuke Asano, & Kentaro Komura
2. 発表標題 The effects of Attachment anxiety and Dark triad on marital violence -examination based on a matched-pair longitudinal study-
3. 学会等名 2020 SPSP convention (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuji Kanemasa & Takashi Arai
2. 発表標題 The causal relationship between attachment anxiety and indirect violence
3. 学会等名 13th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金政祐司・古村健太郎・浅野良輔
2. 発表標題 愛着不安ならびにDTが夫婦間の間接的暴力に及ぼす影響～夫婦ペア縦断調査からの検討～
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金政祐司・荒井崇史
2. 発表標題 愛着不安とDTDDIはDaVの先行要因となり得るのか？
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒井崇史・金政祐司
2. 発表標題 愛着不安とDaV恋人支配欲求の媒介効果の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kanemasa, Y, Asano, R, Komura, K.
2. 発表標題 The effects of both Attachment anxiety and DTDD on indirect violence toward partners in married couples. -Senses of rejection from partners as mediators-
3. 学会等名 29th International Congress of Applied Psychology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金政祐司・荒井崇史
2. 発表標題 愛着不安とDTDDが恋愛関係での間接的暴力加害に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金政祐司・荒井崇史
2. 発表標題 パーソナリティと関係性が恋愛関係の間接的暴力に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒井崇史・金政祐司
2. 発表標題 支配欲求と暴力 デート暴力をもたらす要因の探索的検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金政祐司・荒井崇史
2. 発表標題 交際時における恋人ならびに他者との関係性と恋愛関係破綻後のストーカー的行為との関連について
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒井崇史・金政祐司
2. 発表標題 愛着不安や被拒絶感はデート暴力加害をもたらすのか？
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金政祐司・荒井崇史
2. 発表標題 恋愛関係破綻後のストーカー的行為を予測する関係性要因 - 恋愛関係についての前向き調査から -
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Arai, T. & Kanemasa, Y.
2. 発表標題 Attachment anxiety and dating violence: Examination of the mediating effect of the need to control.
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金政祐司・宮川裕基・荒井崇史
2. 発表標題 Dark Triadと心理的IPVは相互に強化し合うのか？ - 4波の縦断調査からの検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金政祐司・宮川裕基
2. 発表標題 不安定なアタッチメントと親密なパートナーへの心理的暴力 - セルフ・コンパッションと思いやり目標を媒介要因として -
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 謝新宇・相馬敏彦・古村健太郎・金政祐司
2. 発表標題 愛着傾向が親密な関係での相互作用への評価に与える影響 - 経験サンプリング法を用いて -
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金政祐司（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 398
3. 書名 ストーキングの現状と対策	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	荒井 崇史 (ARAI Takashi) (50626885)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	相馬 敏彦 (SOUMA Toshihiko) (60412467)	広島大学・人間社会科学研究科(社)・准教授 (15401)	
研究分担者	島田 貴仁 (SHIMADA Takahito) (20356215)	科学警察研究所・犯罪行動科学部・室長 (82505)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関